

捕虜志による秀吉朝鮮の役

内 藤 雋 輔

私はこれまで多くの学者が行ってきた秀吉の朝鮮の役という7年にわたる大戦争を、軍事的・政治的な方向から見るとは立場をかえ、この戦争が日・鮮両国の民衆に与えた苦悩ということを中心として、その中でも最も悲惨な状況におかれた捕虜の問題を中心として考えてみようという試みをしたのが、昨春、東京大学出版会から刊行した「文禄・慶長役における被擄人の研究」という一書である。然しこの本は800余頁にわたっており、その資料は主として漢文で記されているので読みにくい点もあるから、それらの中から興味のあることを要約して一般の人々に理解してもらいたいというのがこの一文の目的である。

先づこの戦争で日本に連れてこられた捕虜（朝鮮側では被擄人と記す）はおよそ2～3万にも及んでいたかと推定される。これはこの戦後、家康の方針から、両国の貿易再開を促進したいということで、家光のころ（寛永20）までの43年間に朝鮮側に送還した捕虜が7500人いたことが記録にあるが、この他に日本内地に本人の意志で、又は日本人との結婚や、職業の安定など種々の理由から日本に居ついた者が、少なくともその倍数あったということは当然予推される。そしてこの捕虜たちを日本での生活状況から大別してみると (1)学者 (2)宗教家や医師 (3)陶芸家 (4)妻妾 (5)奴僕などに区分することができよう。

先づ学者としては李朝の代表的朱子学者として知られる姜沆がある。彼は江戸時代の中心教学として栄えた朱子学に大きな影響を与えた藤原惺窩や、林羅山を指導して大きな功績を残しているが(本文15～34頁)、また文人として徳島の蜂須賀家から客員待遇をうけた鄭希得(本文39～54頁)とか、堺からひそかに明使の船に便乗して、南支那の福建地方に渡り、大儒朱子の郷里などで有名な書院（郷学）に参加して明の学者と討論を重ね、北京では明の天子からその労をねぎらわれて御馬を下賜され、鴨緑江をへて本国に帰った魯認(本文330～470頁)の三人が代表的な学者であり、それぞれ旅行記とか見聞録、日本の政治や民情などについての記録を残していて、当時の日本の政情や農民などの実情とか、又は日本の歴史・風俗・人情などに触れているところに興味がある。

中でも姜沆は公卿の学者である藤原惺窩の献身的援助をうけ、当時の有名な武将である石田三成とか龍野城主の赤松広通や、小浜城主の木下勝俊などにも指導をつづけて深い交遊があり、彼等の援助をうけて本国帰還の乗船を入手した程であるが、この姜沆の残した看羊録には姜沆等が四国の大洲に連行され、長い舟旅の疲れと飢餓とで、大洲の河を渡る水中で動けなくなった状況を、対岸で見ていた一人の農夫が涙を流して「太閤さんはどうしてこういう人々を捕えてきたのか、またどんな仕事をさせるつもりだろうか、神も仏もないものか……」と急いで家に帰り、湯茶や食物を運んできてくれたので、吾々もやっと生気を取り戻すことができたのだ。倭人の中にもこのように誠実な人がいる……」と心から日本の農民たちの真情に感銘していることが記されている。(本文17頁)

また惺窩が姜沆に語った言葉として「日本人がこの朝鮮出兵の時ほど苦しんだことはない。

従って朝鮮がもし、明軍とともに、日本民衆の意をよく察して、無道のやからを征伐し、先づ降倭と通訳とをして、仮名文字の高札を建て、日本討伐の理由をよく説明し、人民を塗炭の苦しみから救い、更にその明兵たちが塵ほども民衆の物を奪わなかったならば、その明の軍兵は江戸を越えて遠く奥州白河の関に至ることも難事ではあるまい、然し万が一にも倭人が朝鮮で犯したように人民の資財を掠奪したならば、対馬さえも占領することはできないであらう」といったことを姜沆は看羊録に記しているが、まことにこの秀吉出兵の裏面の実状を語る記事として注目したい。(本文33頁)

更に姜沆が赤松広通の学問や人物をほめて「日本の將軍はことごとく盗賊というべきであるが、ただこの広通だけは立派な人物である。日本では儒教は行なわれているが、儒教の基本倫理である祖先を弔らう喪礼を知らない。然しこの広通だけは儒家として守るべき三年の喪制を実践しているのみでなく、深く中国や朝鮮の礼制を守っており、喪中に用いる服装の規定は中国や朝鮮の礼制を好み、必らずこれをまねようとしている。これは日本にいても日本人とはいえないものだ」といって広通の孔子信奉の篤いことを評していて興味が深い。このように姜沆の記録の中にはそのころの日本人の間に、中国思想がどんなに深く浸潤していたかを知らせる記事が多い。

更に同じく朱子学者として注目すべきことは、今、韓国々宝とされている錦溪日記を残した魯認である。この日記の原文は難解な草書体の漢文であるが、これを苦心して漸く活字体に解読しておいた。その中に魯認が明の学者と問答している記事に注目すべきものがあるから次に述べよう。(本文329～470頁)

一般に朝鮮の開国者として伝えられるのは箕子であるが、この箕子は周王朝の初(前1000年頃)に中国から朝鮮に渡って周の文化……後に孔子の教学と称せられる思想の基本を伝えており、その伝統は後世まで固く守られ、謂ゆる東方君子の国とも称せられ、箕子八政の名で残っており。例えば父母が死去すると貴賤の別なく三年の喪に服し、菜食して肉を遠ざけ、墓の側に草庵を結んで哀泣し、粥をすすり、酒肉を断つという儒教の規定を固く守っているということなどを魯認が語ると、明の学者たちは中国では三年の喪制は早くすたれ、明代になると一部にのみ残っているだけだといっただいに感心したことが記されている。また特に親に孝行を尽すということは人間として最高の道徳だとしているので、親が病気の時には「糞を嘗め、指を斬り、流れる血を口に入れ、こうして父母を蘇生させる」という習慣が行なわれているといっただい明人を驚かしているが、これは今日、わが国の年輩の母親たちが、幼児の病状を素人判断するためには、その児の大便の色を見たり、臭いをかいだりして病状を判断したりしていることにも通じており、また病気が悪化した時には輸血をすることと同じであるが、その原型がここに示されていることはまことに興味がある。(本文404頁)

次に宗教家として注目すべき人としては先づ熊本市本妙寺の住持となった日遥上人である。この日遥は12才の時に清正の軍に捕えられて日本に来たが、その才智を愛した清正の援助を受けて勉強し後にその菩提寺の本妙寺住持となったが、彼が故国の父との間に往復した文書が今日数通も残っており、そこには日遥が切々綿々たる祖国や双親への愛情がみなぎっており、共感の涙なくしては読下しがたいものがある。(本文300頁)

次には京都の黒谷にある西雲院に住した宗嚴である。彼は生れながらの性的不具者であったので、日本に来ては二、三の武将の息女たちの侍者となっていたが、後に深く人生の無常を感じ、智恩院において出家し、一生を道心堅固な念仏行者として、千日から万日の念仏行願の道場を建て、多くの人々を導いたことも忘れてはならない。(本文312頁)

更に関心を持つべき僧としては宇和島にある藩主伊達家の菩提寺大隆寺の譲天に関する物語りがある。この譲天は父が捕虜として大分地方に連行され、やがて仏教信者しじょうてんとなった。ところが此の父が宇和島に移住すると譲天もこの地の大隆寺の小僧となり、やがてその才能と努力が実って大隆寺の住持となることができた。

ところがこの寺には前宇和島城主の父で秀吉の愛顧をうけた富田知信が狩野光信に描かせたという秀吉の画像があったが、関ヶ原役後、徳川の天下となると、秀吉画像を掲げることなどは禁忌すべきものとされたようで、久しく埋もれて放置されている間に、表装もひどく破損してきているのを見つけた譲天は深い感慨にうたれた。即ち「秀吉の朝鮮出兵がなければ自分等父子は日本に連行されるという悲しみも起らなかったであろう、然し一方、こうして捕虜の身として日本に来たからこそ、わが身を仏門に導き、釈迦の妙法をきく機会にも恵まれたのではあるまいか、かく考えてみると、秀吉のこの戦争は私にとっては悲喜こもも至るということになり、まことに運命の不思議さにうたれざるをえない、更にこうして自分がこの寺に来ることになり、思いがけなくも、その恩讐ならび存するこの秀吉の画像のかくも汚損した姿に接するとは、これはどういう因縁であらうか……」と痛嘆して早速、宝永7年(1704)に自から携えて上洛し、表装を改めて後世に伝えることにしたのである……」という後記が今日残っている。私はこの画像と後記とを宇和島の博物館で拝観し、深い感慨を覚えた次第である。尚この画像は秀吉像の代表的のものとされ、かつて国定歴史教科書にも載ったことがある。

最後に「日延上人とその姉」に関することを述べよう。この日延については朝鮮王孫にちえんであり、清正が捕えた二王子の一族だという説など諸説がある。ただこの姉については戸川達安みちやすの側室となったと伝えられ、今日、その立派な位牌が福岡市にある香正寺の過去帖に記されている。

ところがこの戸川達安というのは宇喜田秀家の重臣であった戸川肥後守達安のことで岡山と関係がある。達安は美作の人で宇喜多家に仕えて朝鮮役に出陣しているが、戦陣において達安が朝鮮土民を深く憐れんだという興味ある話が伝えられている。

それは朝鮮陣で戸川氏が設営をしていた時、その地の土民が恐れて逃げ出した。そこで達安は彼等に「汝等を殺すのではないから心配するな」といって600枚の木札を作って彼等に分ち与え、この木札を持っておれば決して殺傷されることはないといったので、土民たちは大いに喜び、油紙に包んでこれを頸にかけて安心した。そこで四方から農民や商人たちが喜んで米や肉を持参してくるので、食糧などなんでも事欠ぐことはなかった。ところがしばらくして達安が他に移動することになり、その後他の日本の部将が入ってきた、その後、そのことを知らない土民達が前と同じように木札を首にかけてきて、肥後肥後と呼んだ、そこで門衛が「汝等は何をいっているのだ」となじって悉くこの土民を捕えて殺したので、これ以後、朝鮮の土民は口をそろえて「日本人は虎か狼だ、近づいたら危いぞ、その上に軍令は紊れている……」とあって山中へ逃げこんでしまって大変、困った、……と記し、最後に「達安は朝鮮人を自分の手にかけては一人も殺さなかった、その理由は、初め戦場で刀を抜いて朝鮮人を斬りつけようとした時、手を合せ、声を出して泣き叫ぶ姿は日本の婦女子や童子にも劣っているのを見て、これは武人の斬るべき相手ではないと決めて決して劔を用いなかった……」とも戸川記に述べていることはまことに興味が深い。

この戦役で朝鮮側から見た日本武将の中では宇喜田秀家とか毛利輝元、石田三成等は一般に温情が深いといっているが、加藤清正や島津義弘等は最も憎まれていたようである。なお、この達安は関が原役後、徳川方となり、備中庭瀬城主となっているが、この戸川家は將軍家綱代

に断絶した。この遠安の墓は現在、岡山市妹尾の盛隆寺に残っている。(本文326頁)

この他、毛利軍に捕えられて萩につれられた南原城主の幼童、李聖賢は王族と考えられ、毛利家の特別待遇をうけて毛利の家の紋の使用を許され、家老格の女と結婚したが、その一族には政治家や武人、名僧・医者・画家などが出ており、明治以後も銀行頭取や県知事などの有力者があり、今も文学博士として活動してられる方もあって私はその知遇をえているし、その一族の中には乃木大将夫人とか百武大将夫人の名も見える名家である。(本文758頁)

これらの外に多数の捕虜たちがどういう方面に活動したかという点、この戦争は一面、焼物戦争ともいわれているように、茶人趣味が盛んとなり、千利休などが出た時代に当っており、出陣の武将たちが競って朝鮮の陶工たちを連れ帰ってきて、朝鮮風焼物を開窯したのが西日本の各地で今日も栄えている陶芸の起源ともなるので萩焼、有田焼、薩摩焼などに代表される陶人の渡来でもある。(本文725～764頁)

この他、異色ある捕虜たちの在り方としては秀吉の寵をうけたが、後に逃亡を計って殺された李暉(本文25頁)とか、北政所に仕えた女子、名医の名を留めた経東(本文744頁)や、卜占を業とする者、豪商の養子となった者、茶坊主として藩侯の側近に仕えた者などが多く、その他、家康の侍者、脇坂安治の小姓、名古屋城主徳川義真の下人、家光の侍女とか料理番となった者、岩国太守吉川広家の侍女、備後水野日向守の妹の侍女、平戸太守の母、一岐島主の妻…というように割合に恵まれたもの(本文201頁)などがあり、更に讃岐太守生駒氏の愛妾姉妹(本文740頁)とか、徳島県川島町の旧城下に眠る林道感の側女の悲恋物語(本文455頁)なども残っている。更にこれら捕虜たちは意外に行動の自由が認められていたり、相互の往来も可能であったらしいことも、限られた人々かもしれないが許されていたようである。(本文26, 27, 42, 45頁)

最後に日本人の捕虜、即ち「降倭」と称せられる者も千人位はいたのである。この降倭という現象が起ってくるのは、戦争初期の優勢な日本軍の進出が、明の援軍を率いる李如松の平壤奪還により小西行長等の日本軍は敗れて京城に退却したのであるが、この時、明の沈惟敬による和議の申出があり、これをうけた行長との間に和議の交渉が開始されるのである。然し緒戦の優勢が頓坐し、その上、北鮮の烈しい寒冷と平壤戦で日本軍の戦死者が1600余人の多きに達したことは日本軍の士気を沮喪させた上に、この和議は沈惟敬に翻弄されて容易に進まず、4年有余にわたる休戦が続くと、半島に滞在する日本軍も食糧不足や氣候の激変、烈しい寒冷などによりホームシックも起り、戦争の空しさを痛感してきたところへ、食糧自給のために朝鮮各地では一種の屯田政策が採用され、朝鮮民衆との共同耕作に近い状況が、自づから朝鮮にいる日本兵の間にも「朝鮮は楽国なり、日本は陋邦なり」という思想も生み出されてきたようで、(本文206頁)その上に朝鮮側では積極的に日本人の勇武なこととか、銃砲の操作や、剣術などの特技を採り入れようとして「降倭」を勧誘奨励し、官位や俸禄をもって誘ったことが大きな原因である。この「降倭」の発生や状況について記したのが第5章であり、全く独自の研究であるが、今は割愛したい。ただこの朝鮮役後、10余年のころ、大陸においては満洲から興ってきた後の清朝が、明王室を滅ぼすという大変動が起ったが、その契機となるのが撫順東方の深河の戦(1619年)である。この激戦において明王室から援助を求められて出兵した朝鮮軍の中に、300余人の鉄砲隊を編成していた「降倭」が活動していることは注目すべきことであるが、この戦役は明軍の作戦の失敗もあり、朝鮮軍も大敗し、この降倭も全員死亡したのである。然しこの事件は一面では日本人の部隊が、大陸の王朝の政変に直接参加した事件としてその名を留めていることを考えたい。

次にこの役に臼杵城主太田一吉の医僧として参加した慶念の「朝鮮日々記」について一言したい。この日記は全文が和歌とその詞書とによる流麗な仮名書きであり、お家流の草体であるから中々読みづらいが、一応活字体に改めてあるので是非、読んでほしい。この日記を一貫して特色づけている点は僧慶念が純真な親鸞教徒としての宗教的体験者であるとともに、従ってまた極めて自己批判の強い人であったことが基本的理念となっていることである。先づここでは特に彼が平和理念に徹した人であり、戦争の悲惨さ、無情さを現実に痛感し、日々の戦場の出来事を卒直に記した戦争批判覚書ともいうべきものを残しておくこと、380余年の昔に、然も封建社会の戦場でよくもかく深い人間の本質を反省し批判し、戦争は否定すべきもの、人間は互に助け合うべきもの、然もその人間は限りない食欲の所有者であると、大胆に卒直に記している言葉には全く頭が下がるので、その点にこそ無限の価値と、吾々への警鐘がある。例えば

(イ) 慶長2年11月19日条には……「日本よりも萬のあき人もきたりしなるに、人あきないせる物来り、奥陣よりあとにつきあるき、男女老若かい取て、なわにてくびをくくりあつめ、さきへおひ立て、歩み候はねば、あとより杖にて追立て打はしらかすの有さまは、さながら阿防羅刹の罪人を責けるも、かくやとおもひ侍り

身らせつのわざは、すける心によりぬれど、よろづあきなふ人の集り

かくせはや、てるまたるみのにやくわんどもくくりあつめてひきてわたせる

かくの如くを買あつめ、たとえば猿をくくりてあるくごとくに、牛馬をひかせ、荷物をもたせなどしてせむるていは、見る目いたわしく有つる事也」と記しているのはこの朝鮮役において、大勢の捕虜が日本につれてこられたこととの関係において、人買い人とでもいべき謂ゆる奴隷狩りに類することが行われたことを物語る大切な記録といえよう。

(ロ) 次に8月4日、釜山の西方河口にわが船団が到着し、上陸を開始した時

「はやはや船より、我も人も、おとらじ負けじとて、物をとり人を殺し、奪いあへる躰、なかなか目もあてられぬ気色也」

谷とがもなき人の財宝とらんとて、雲霞のごとく立ちさわぐ躰

と、誠に浅ましい掠奪風景を描いているが、更に8月6日に進軍を開始するや

(イ) 6日、「野も山も城は申すにおよばず、皆々焼き立て、人をうちきり、くさり竹の筒にて首をしぼり、親は子を歎き、子は親をたずね、あはれなる躰、はじめて見侍る也」

野も山も焼きたてによぶ武者の声、さながら修羅の、ちまたなりけり

と親と子が離ればなれとなり、泣き叫び、喚び探す姿は全く修羅道そのままだと記している。

次に8月11日から15日にかけての南原城の日・明・鮮の両軍、およそ10万近くの大激戦について

(イ) 11日「夕暮て人家の煙の立つを見れば萬の五穀のたぐひ、財宝を焼きうしないて」

浅ましや五穀のたぐひ焼きすつる、煙の跡に一夜臥すなり

城（南原城）よりもはなつ鉄砲半弓に、思ひよらずの人ぞ死にける

むざんやな、知らぬうき世の習とて、男女老小死してうせけり

たれも見よ、人のうへとはいひがたし、今日を限りの命なりけり

なんもんの城を立ち出で見てあれば、目もあてられぬ風情なりけり

と、この大激戦後の荒廃に慶念は心をいためている。こうして慶長役での最後の激戦地である蔚山籠城となるのであり、11月11日ころから夜を日に継いで築城工事が進められ、近くの山

に入って材木を伐りとり、或は鍛冶、番匠の動きが烈しくなってきた。

(一) 油断なく、かじはんせうのたたきあひ、うちきる槌に、火えんこそ立て

同13日「いかなる人もよくよく御らんあれ、そんしの前つちと申しながら、三悪はただ目の前にありけんや、とにかくあやまりのある者こそ、ろうにおし入れ水をのませ、くびがねにてくくりしぱり、やき金をあて候事はこの浮世にことさら御座候……」

(二) 三悪は、ただ目の前にあるぞとよ、とがするものを、ろうごくとなす

侍のあすを知らずと、のたまへど、とんよくしんのぐちは、はなれず

同14日「とかく人界の有様は、三毒の罪より外は別のなすこととは、なしと見えたり、侍をはじめて、物をほしがり、むりに人の財宝を奪いとらんと、たくみより外は子細しさい、さらさらなかりしなり、

同日、かやうに、明日しらず、うき世にてまづまづ楽をいたせなどとあれども、心中は皆皆、悪心のたへはなかりしなり、夜すがらの人を責めて石をつませ、城ふしんもさらに餘の子細はなし、人の物をうばひとらんと、たくみ、とんよく（貪欲）の外はなし」

(三) 夜もすがら、石を引かする城ふしん、ただとんよくの、はじめなりけり

同16日「山に追い登せては大材木を取らせ、とりたる木の細ければ取り直せとて、又はおいやり、取りに上れば唐人から首を斬られ、思いの外に死にけり、又不用なるあれば、かくれにげ走りなどしたる者もありけり。

と」こうして日に増し戦備増強のための苦しみは増してきたが、これについて

(四) 百姓も、大名小名おしなべて、口ゆへにこそ骨はおりめせ

とも皮肉っているが、寒さは益々きびしくなってくるので

(イ) 嶺々を、ふりつつみたる雪なれば、木こり人の、うきを身にしむ

(ロ) はげしきは、ね屋のひまよりふきおくる、嵐は雪の むれぞまひきて

老が身は、風にむかへるともし火の、今をもしらぬ、命なりけり

などと苦しい籠城をかさねていたところ、突如として明と朝鮮の大軍が雲霞のごとく来襲したのである。即ち「22日の辰の時ほどに城より東に煙立ち、鉄砲の音きびしくきこへけるに、いかがときけば、唐人さし出で、中国の小屋に火をかけ、夜かけ有と申候、さてはとて各各馳集りてあらるるに、朝めしの時分、猛勢なるにより、城へ籠て可然といへば、我も人も籠らんとて取り乱しわけ入けるに……」とて

(ウ) 我さきへ、こもらん物を城へとて、とりらんぼうに、なんぎおぞする

すはやこそ、てうせんからの者どもは、雲かのごとく、うって出ける

同25日になれば「水にかつへて迷惑しけるに、雨になりて、きつく降りしかば、城中諸人、口をぬらしけるなり」とて

(エ) 日本は神国なれば、憐れみの、雨をふらして、人をうるほす

と、寒さの外に飲み水に困った籠城軍士の姿が示されているが、更に「かほどに水なければ、我々は手を洗うべき人にもあわず、いかがと思ひて雨のもる所へ、もりをすけて紙をぬらして、手をすこし洗いしなり、あぢきなき躰なり」と記して

(オ) 今日までは手洗水もあらざれば、雨のもりにて指を清めし

同26日「さてかくの如くしては穀・水にかつへて死せんことは必定なり、はや悉く行きたおれて、死するもののみなりければ」と記し

(カ) この城の難儀は、三つにきわまれり、さむさひだるさ水のみたさ

と歌っていることはこの蔚山籠城戦の苦しい真相をよく現わしている。

こうして12月28日には日本と明との間に休戦が成立し、翌年1月17日に太田一吉の軍に帰国命令が出て慶念も帰っておる。このように慶念の日記の幾箇所かをとってみても慶念の天衣無縫とでもいうべき人間性に接することができ、秀吉の朝鮮役の知られない裏面史を私共に知らしてくれるのである。

(52年1月15日)